

追体験する主体の誕生：「名所図会」と同時代の メディアが達成した視覚革命 (Sociology Next 40 小論文・メディアコンテンツコンテスト準グランプリ 受賞作品)

著者	福山 佑樹
雑誌名	関西大学社会学部紀要
巻	39
号	3
ページ	255-262
発行年	2008-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/12425

Sociology Next40
小論文・メディアコンテンツコンテスト
準グランプリ受賞作品

“追体験する主体”の誕生
—「名所図会」と同時代のメディアが達成した視覚革命—

(マス・コミュニケーション学専攻 3年)

福 山 佑 樹

はじめに

本論文では、西暦1800年前後に登場し、日本各地で印刷出版された「名所図会」をメディア研究の視点から分析する。周知の通り名所図会とは近世日本における大ベストセラーの一つだが、文学史や美術史から分析した研究が多く存在するにも関わらず、社会学、とくにメディア研究の視点から考察された研究は、ほとんど存在しない。

そこで本論文では、①メディアとしての名所図会の特徴を分析し、②同時代に視覚革命(スクリーチ, 1998)を迎えた「料理本」および「春画」との連動を探り、③それら印刷メディアにおける“追体験する主体”の誕生を考察する。この“追体験する主体”の誕生は、“国”あるいは“国民”の意識が形成されていく流れのなかで理解されるべき現象であり、それは現在、そして未来の日本のメディア文化と、無視できない関係を持つことを明らかにしたい。

1. 名所図会と旅行用心集

名所図会の祖とされる『都名所図会』は、秋里籬島(著)竹原春朝斎(画)により1780年に印刷された。これ以降、各地の名所図会シリーズが刊行されたが、内容は鳥瞰図、風俗図、俳諧、紹介地に関する簡略な地理情報で構成される。もちろん名所図会以前にも『東海道道中紀』(1655)や『山州名跡史』(1711)など、観光ガイドブックの始祖と目されるメディアは存在した。だがそれらは旅の上級者向け「地誌」であったのに対し、名所図会

は平易な文章で書かれていること、挿絵が多用されていることなどが特徴として挙げられる。つまり名所図会は、視覚情報を主に、文字情報を従に据えた点で独特だった。この新登場のメディアは、多くの旅慣れない人々、あるいは移動を厳しく制限されていた婦女子を巻き込み、一大名所図会ブームを巻き起こした。

ならば、名所図会とは実際に人々に旅をさせる為のメディアであったのだろうか？ 名所図会のいくつかの気になる特徴から、この点を考えていきたい。

第一に、名所図会には実用的な宿情報の記載が無い。記載があるとしてもそれは鳥瞰図の中に風景の一部として、簡略に記載される程度である。また寺院や温泉といった観光地に関しても、紹介されるのは歴史やその場に関する伝説などが中心である。名所図会を片手に持ち、その場を実際に訪れ、旅に参加させることを意識して作られているとは考え難い。

次に、風俗図と鳥瞰図の変化について。先に述べたように『都名所図会』以降、様々な名所図会が刊行されるが、その中で鳥瞰図と風俗図に大きな変化が見られる。

まず鳥瞰図について。鳥瞰図とはその土地を鳥の目線から俯瞰した図であるが、その俯瞰する視点が初期の名所図会に比べ後期になるほど低下する。鳥瞰図と風俗図の区別は曖昧になり、場合によっては描かれた人々の表情が読み取れる程になる（図1、図2参照）。

また、風俗図は1780年の『都名所図会』では挿絵全体の17%に過ぎなかったのに対し、1787年に『都名所図会』の続編『拾遺都名所図会』では、挿絵全体の31%に倍増している。加えて、挿絵画家も後期の名所図会では丹波桃溪や蔀関月など、人や風俗図を描くことを得意とする絵師が挿絵画家として多く起用されている。以上のことから、名所図会は年を経ることに、土地を一望できる鳥瞰図よりも、人々の生活風景が観察できる風俗図が重視されていった変化が見えてくる。

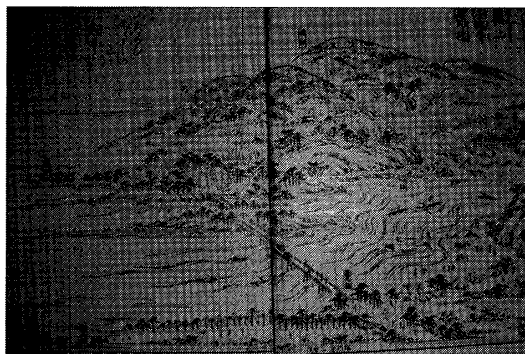


図1 都名所図会の鳥瞰図

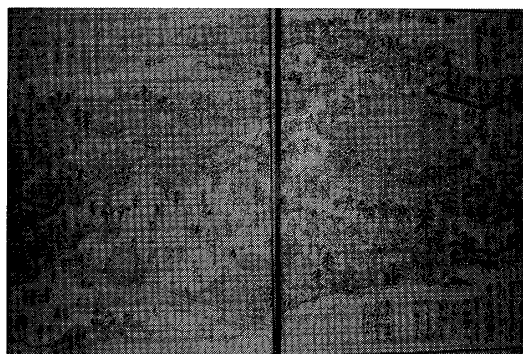


図2 伊勢参宮名所図会の鳥瞰図

更に、『播磨名所巡覧図会』は、江戸や京に比べて実際に訪れる人は少なく、また掲載地点も網羅的ではなかったにも関わらず、上方町人の知的欲求を刺激し、記録的に多く印刷されたとされる（長谷，1980）。

つまり、名所図会は実際に旅をするにあたっての観光ガイドブックではなく、むしろ、見知らぬ土地や人々の文化を、挿絵を多く用いることによって視覚的に学ぶことの出来る教科書的役割を担うメディアであったと考えられる。

続いて『旅行用心集』というメディアについて。これは『都名所図会』の30年後、名所図会ブームも終わりに近づいた1810年に、八隅蘆菴によって記された、活字中心の書物である。旅の道中や宿屋、温泉での注意事項や役立つ情報を、著者が自身の旅の経験を基にして記したものであり、かなり実用的な、そして旅慣れない人々の為のマニュアル書である。以上から、近世江戸において①旅の上級者が使う専門的な地誌から、②旅慣れない一般の人が見て楽しむ名所図会へ、③そして一般の人が実際に旅する為のマニュアルである『旅行用心集』へ、という観光ガイドブックの変化が観察できる。

では、このような変化は、名所図会を代表とする観光メディアに限られたものなのだろうか。以下で考察を試みる。

2. 料理本

ここで着目するのは、名所図会の有名挿絵画家たちが挿絵を提供していた料理本である。

名所図会の登場以前にも、近代的な料理本は『料理物語』（1644、著者不明）などが存在したが、原田信男の研究によれば料理本の数自体が少ない上に、内容も「江戸時代には料理技術が著しく発展したが、これらの料理本を著者として書き残し、読者として支えたのは共に専門の料理人であった」（原田，1989, p.100）という。料理本は、あくまでプロの料理人が参考資料として使うための専門書であったと考えられる。

そのような料理本に変化が見え始めるのは、1750年頃である。たとえば和歌のような風流な料理名を付けたことで知られる冷月庵谷水の『歌仙の組糸』（1748）や、豆腐を使った百種類の調理法を紹介する浅野松羅坊の『豆腐百珍』（1782）など、実際に料理をしなくても見て楽しめる挿絵入り料理本が多く現れるようになる。これらの遊びの要素を多く含んだ料理本は、多くの料理の素人達に読み物として楽しまれたという（柳原，1985；原田，1989）。

さらに1800年頃からの料理本は、①「本書〔素人包丁:引用者注〕を読み、記載の料理を試作してみた結果天明期に出現した百珍料理の例に見られるような突飛な料理はなく、

すべて実用的なものであった」(福田・島崎, 1985, p339, 括弧内筆者)という。また、②料理道具の取り扱いを中心に紹介する料理本、問答形式で料理法を説明する料理法を説明する料理本など、新しい形式のものが多く登場した、③この時代の料理本の著者は料理の素人が多い(川上, 1998)、そして④浅野高造の『素人包丁』(1803)や『細工包丁』(1806)に代表される素人向けとされる料理本が多く刊行されていること、などが特徴として指摘できる。

すなわちこの時代の料理本も名所図会と同様に、素人向けのマニュアル書へと変化している様子が見えてくるのである。

3. 春画と黄素妙論

同じく1800年代初頭の視覚革命と書物のマニュアル化の流れについて、春画の場合をみてみたい。なぜ春画なのかは後述したい。春画とは男女の性行為や裸体を描いた江戸時代の絵画であり、現在でいうポルノグラフィである。18世紀の後半から19世紀の初頭に黄金期を迎えたとされ、葛飾北斎や司馬江漢など多くの画家達によって描かれた。

その特徴は、性器の誇張描写、笑いの要素を多く含む娯楽性などが指摘されている。タイムン・スクリーチの研究によると、これらの使用はあくまで見て楽しむ、もしくはマスターベーションするためにあり、性教育や異性間性行為と直接的に繋がるものではなかったという(スクリーチ, 1998)。

それに対し、『黄素妙論』という書物が、関西大学総合図書館に所蔵されている。これは曲直瀬道三が1552年、松永久秀という戦国武将に贈るために書いた性行為の指南書であるが、注目すべきは1808年に「再版」されたことである。1552年版の原典があるとはいえ、それは個人的な文書だった。それが1808年には奥村慎猷によって大量印刷された。現在残るのはこの1808年版のみである(山崎, 2004)。

『黄素妙論』の内容は、性行為の技術や性行為をする際の注意事項、性行為をおこなってはいけない場所や月日など、明らかに実際に性行為をする為のマニュアル書である。こうして1800年代初頭には、性に関する書物も「見て楽しむ春画」から『黄素妙論』へとマニュアル化していることがわかる。

4. マニュアル化される書物と人々

ここまで名所図会、料理本、春画が1800年代初頭に連動して、初心者向けのマニュアル書に変化している様子を見てきた。ここで「連動」と書くには理由がある。その最も重要

な要素は、名所図会の挿絵画家たちによる横断的な活動である。

まず、最初の名所図会である『都名所図会』などを描いた代表的な挿絵画家・竹原春朝齋は、実は『絵本美徒和草』（1776）や『枕童子拔差万遍玉莖』（1781）など多くの艶本（春画を集めた本）を世に出している。同様に、『住吉名勝図会』（1805）の挿絵画家である岡田玉山は、名著の誉れ高い『素人包丁（二編）』（1784）という視覚を重視した料理本の挿絵を描き、他にも『天保山名所図会』（1835）の暁鐘成が『飯百珍伝』（1830）、『花洛名勝図会』（1862）の松川半山が『料理早工夫』（1856）など、多くの画家が名所図会、料理本、春画を横断して挿絵を描いている。

また、地方の人々は都市部へ旅で訪れた際に料理本を地方に持ち帰り、そのことで地方に料理文化が伝播したという研究もある（揖斐，1998）。これらのことから、名所図会、料理本、春画は少なからず連動していたと考えられる。

こうした三つのメディアの連動から、どのような時代の変化が見えるのだろうか。いうまでもなく1800年以前にも旅する行為、そして料理や性愛の行為は存在した。しかし、それら諸実践と、書物を読んで知識を得るというメディア実践は、必ずしも接点を持っていなかった。より正確に言えば、一部の専門家やプロが『山州名跡史』のような地誌を読み、『料理物語』のような専門料理書を読んで、自らの活動の参考としていたと考えられるが、しかしその一方で、圧倒的多数の人々にとって、料理や旅の行為は書物を読む行為とは別に、書物とは無関係なところで実践されていたはずである。

ところが行為と書物の関係が、1800年頃から変化した。人々はこの時代、料理や旅を自身で実際におこなう為に書物を読むようになり、料理本の中の料理を実際に作ったり、性行為の指南書を読むなど、マニュアル書によって書物の追体験をするようになったのである（図3参照）。つまりこの時代に“追体験する主体”が誕生し、その為に書物が連動し、その結果としてマニュアル化していったと推測できる。

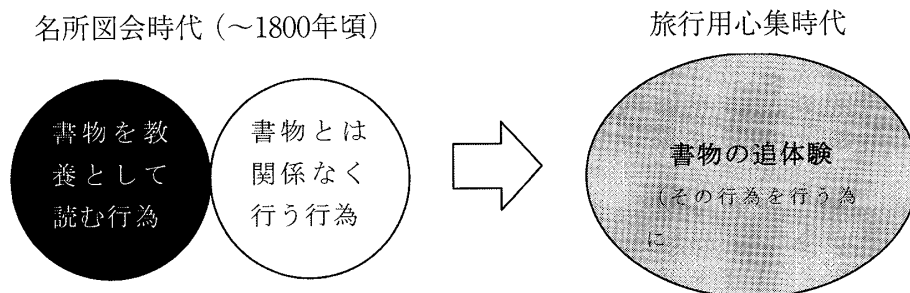


図3 書物の追体験

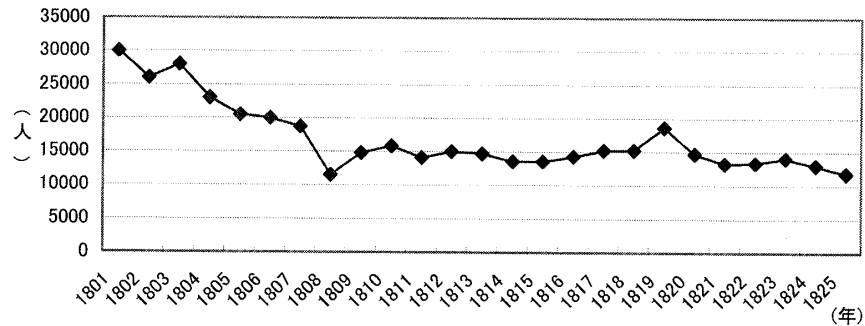


図4 熊野詣参拝者の推移

追体験という語について、もう少し触れておく。観光客の欲求はメディア（この場合では名所図会）によって一度、頭の中に作られたイメージが確かめられた時に満たされる（須藤，2005）とされるが、その事について熊野詣を例に考える。熊野詣は1800年頃から参拝者数が減少している（図4参照）。熊野は、江戸期を通じて名所図会が作られなかった。それゆえに同時代の人々の間には追体験に必要なイメージが共有されず、追体験の可能性が狭まっていったと考えることもできる。1800年以降に熊野詣の参拝者が減少したのと反比例して、『伊勢参宮名所図会』が制作された伊勢詣が「おかげ参り」として未曾有の活況を迎えた。

つまり追体験には一度、頭の中にイメージが作られる段階が必要であり、ここまで見てきた1800年前後における名所図会や料理本の視覚革命こそが、そうした書物というメディアを通じたイメージ共有の機能を果たしていたと考えられる。

5. “追体験する主体”と現代

1800年前後の“追体験する主体”の誕生は、どのような時代背景において実現したのだろうか。最後に、化政期とよばれるこの時代に特有の視覚革命と“追体験する主体”の関係について考えてみたい。

森谷剋久の研究によれば「統一国家を思考する構想が、化政期に出現した」という（森谷，1967, p.2）。化政期には、後の幕末期に大きな影響力を持った本多利明や大田南畝など、国外の世界情勢にも目を向けて「日本」という単位で情勢を把握しようとする思想家が現れはじめた。さらに「この頃、以前からあった『御在所』『御領分』『御国』などの法令用語のほかに、『国』に関連する一群の語として、『国家』『国宝』『国政』『国主』『国威』、また『国産・国用・国益』などが多く使われ出す」という（横山，1976, p115）。こうして化政期では、日本国内の様々な分野で、“国”や“国民”といった共同体意識が形成さ

れ始めていたことがわかる。加えて文化面においては「大衆化、等質化という全社会層を包み込む状況が出現し、国民的規模での文化現象が現れる時期」であったとされる（森谷, 1967, P.8）。

こうした時代背景と印刷メディアによる視覚革命、そして“追体験する主体”の誕生は決して無関係ではない。視覚革命によって広く「国」の文化を俯瞰する視覚イメージが広まり、それは書物のマニュアル化と相俟って、より多くの人々が新たに整備されつつあった「国民的教養」を追体験する機会を得た。そうして書物の情報を追体験する主体は、旅や料理など、地域や社会階層によってバラバラだった文化を「国」レベルで等質化して大衆化した。やがて全国規模で共有される追体験は、近代日本における“国民”の意識を形作る動きの一端を担った。

“追体験する主体”の誕生は、“国民”が形成される流れの中で、メディアと人々の相互作用において生まれた現象であり、その誕生は1800年頃の化政文化に始まったと考えられる。だがこれは、過去の出来事ではない。

現在、「地球の歩き方」などの観光ガイドブックを考えた時、私達の観光行動の大部分は追体験によって構成されている。例えば年間100万人の邦人が訪れる“日本人の楽園”グアムは、かつて日本領“大宮島”であった。しかし、日本人が認識し、訪れるのは観光ガイドブックで紹介されるタモン湾周辺のごく限られた地域だけであり、多くの日本人はかつてそこが大宮島だった事実すら知らず、ガイドブックで紹介される「グアム」を追体験するという（山口, 2007）。

旅とメディア以外にも、たとえば必ずといって良いほど、予め写真などによって出来上がりの視覚イメージが提供される様々な料理レシピ集がある。或いは『スロー・セックス実践入門』（アダム徳永, 2006）などの性のマニュアル本が一大ベストセラーとなる現在の日本社会でも、私達の行動は追体験と密接な関係にあり、いわば化政期に誕生した追体験する主体として生きている、とみることもできる。本論文で分析した“追体験する主体”は、現代の社会学の重要テーマとして分析する価値を有すると考えられる。

主な参考・引用文献

- 揖斐高. (1981). 江戸文人の遊歴と料理. 石川寛子, 芳賀登. 全集日本の食文化7. (1998). 雄山閣出版. 209-219.
- 笠原正夫. (1989). 「熊野年代記」と近世の熊野. 熊野三山協議会, 三熊野総合資料館研究委員会. 熊野年代記. 339-343.

- 川上行藏. (1980). 江戸の料理書に関する研究第2報——徳川時代における料理書の執筆者について——. 石川寛子, 芳賀登. 全集日本の食文化7. (1998). 雄山閣出版. 109-126.
- 森谷剋久. (1967). 国民文化の形成と化政文化. 芸能史研究会. 芸能史研究, 18: 1-9. 新潮社. 芸術新潮. (2003. 1).
- スクリーチ・タイモン. (1998). 春画——片手で読む江戸の絵, (講談社選書メチエ). (高山宏訳). 講談社.
- 須藤廣, 遠藤英樹. (2005). 観光社会学——ツーリズム研究の冒険的試み. 明石書店.
- 長谷章久. (1980). 日本名所風俗図会13. 角川書店
- 原田信男. (1989). 江戸の料理史, (中公新書). 中央公論社.
- 福田浩, 島崎とみ子. (1985). 日本料理秘伝集成15. 同朋社.
- 柳原敏雄. (1985). 日本料理秘伝集成10. 同朋社.
- 山口誠. (2007). グラムと日本人, (岩波新書). 岩波書店.
- 山崎光男. (2004). 戦国武将の養生訓, (新潮新書). 新潮社.
- 横山俊夫. (1976). 「藩」国家への道. 林屋辰三郎. 化政文化の研究. 岩波書店. 81-130.